

閃光録

二、領域

平等に偏れば二乗であり、差別に囚われる者は凡夫である。

平等に偏つて道を忘れ、差別に囚われて迷路に泣く。

平等に偏つて因果を無視し、差別に囚われて因果に束縛せられる。

平等に偏つて組織を無視し、差別に囚われて進展を欠ぐ。

平等に偏つて人生の現実を無視し、差別に囚われて運命を悲しむ。

平等に偏つていつしか空想家となり、差別に囚われて自らを卑下する。

平等に偏つて飯が食えなくなり、差別に囚われて七面鳥となる。

平等に偏つていたずらに破壊し、差別に囚われて老人となる。

平等に偏ることは、真に平等を知つたことでなく、差別に囚われることは、真に差別を生かしたことはない。

信眼、畢竟平等の涅槃界に通じ、南無阿弥陀仏の不行、差別に直入して、細胞の一をも生かして、合掌となり、念仏称名となる。

差別を生かさなない平等は、平等にあらず、平等に即せざる差別は差別にあらず。悪平等に無理があり、悪差別に圧制がある。

師には領域があり、弟子には弟子の領域がある。弟子として真に立派ならざる者は、師としても立派ならず。親鸞聖人、師に絶対的帰依合掌の態度をとる。念仏して師と共ならば、地獄すらさげぬ。この被教育的体験は、世界のいかなる学生生徒も及ばず。さればこそ、その求道の行歩のままが、千古に一切衆生の師表と輝く。

差別に生ききつて、師弟一如平等。

宗教を無視せる明治以来の日本の教育。師は師となる前に永遠の弟子にあらず、弟子にして、弟子の領域を越えて、師に対して反抗のストライキを起す。教育の根本義すでに失われて、真の教育あることなし矣。

親に親の領域があり、子に子の領域がある、兄には兄の生きねばならぬ世界があり、弟には弟のとるべき生活態度がある。

それぞれがとるべき生活態度をとり、分を守り、節を全うするところに正しい生活がある。

子は子たらずして、親は親たるを求め、親は親たらずして、子に子たるを求め、兄は兄たらずして、弟に弟たるを求め、弟は弟たらずして、兄に兄たるを求むる時、家は、この人を中心として非常時を出現す。

科学を真に研究せよ。されど科学には科学の領域がある。精神偏重の世界は、積尊のとらぬところ、宗教にもまた、その領域がある。科学を無視して精神界に囚われるば迷信に陥り、科学を偏重すれば、科学は悪魔殺人の武器となる。

自転車製法の説明、運転する車輪の倒れない理論の研究は、科学に属する。しかし実際自転車に乗ることは、理論の領域ではない。体の細胞の一つ一つが自転車に乗ってくれば乗られはしない。宗教は、正しい論理を求める。しかし、こと全身全霊の問題である。細胞の一つ一つの問題である。これを精神界という。行という。

われはまたしても巖上の松を言う。

巖上の松こそ、終生のわが師であり、わが友である。

彼かつて、苦悩を他人に告げて同情を求めず。

彼かつて、悲観、絶望、厭世して、天地に反逆せず。

彼かつて、自力小我に囚われて功を他人に誇らず。

堅き巖上に創造進達の一道をとつてたじろがず。

冷たき海辺の嵐に荒らされて屈せず。

彼、彼なりしことに満足せるか。ただ黙々として続けられた幾十百年の苦闘。

満月清く彼の上に懸る時、彼の感慨やはたしていかに。

変らぬ緑の節操には、自ずからなる気品あり、

松籟、波と和して消えるところ、大自然の親の聖容、みすがた波の上に光る。

寂々として老樹巖上に聳えて、天地と彼と一枚。

声なき声、われに教ゆ、

聖人の一生にも似たるかな、彼の生きる領域を憶う。

一国最高の文教の府を去つて、罪を闕下にわびる人、明鏡止水を言う。

われ、二十有四歳にして、この明鏡を六字の不行によつて粉碎され、人と生まれて以来、かつて絶え間なき無明の風によつて止水を得ず。ゆえに、ただ散乱鹿動の胸に念仏あるのみ。

官立の最高学府を出でたる者、師範学校長を辞して、神の名によつて病氣祈祷の藪医者がりとなり、無学の老婆、祈祷、卜占、邪神、運命論等々の一切を蹴破つて、人格独立の不行に生く。われ現代の教育を疑う。彼はたして彼の生くべき領域に生きたるか。

青年よ。無我イズムをふりかざす前に、汝、無我なるか猛省一番せよ。過去の聖者、何ゆえに幾十年を苦闘修業に費したか。

汝の眼、耳、鼻、舌、身等の幸福のために、何ゆえにかく大声を発して怒号するぞ。大法真理の蹂躪せられたる時のみ怒号して可なり。

大衆の動向重んずべし。大衆の訓練尊重すべし。しかし、一人の空海、一人の親鸞、一人の日蓮、一人の道元出でずば文化の大飛躍あることなし。個人の大勇猛精進、自己完成の領域には、涯底あることなし。如来に涯底なきを説くは、けだしこの無限の領域を示すものである。

されば青年よ、自己完成の願をすてて、眼を外にむけ、生活の動向を自己完成よりそらして、いたずらに社会改造屋に墮落することなかれ。

かくのごときは、一片の我慢と、パンフレット式知識とにても、なし得るがゆえである。青年よ、青年の領域を知れ。

天道おそるべし。 恵み感謝すべし。

放逸懈怠誠むべし。 言行慎むべし。

真理尊ぶべし。 愚味愧ずべし。

欲望制すべし。 願全うすべし。

不徳悲しむべし。 聖賢敬うべし。

ただ戦々競々として己を省み、しかも大胆に念仏する。これ宇宙を背景として生きる、われの領域を信知せる者の生活である。

天道怖れざれば、後漸く法界は汝のための^{れいご}圜とならん。

恵みを感じせざれば福徳遠ざかつて落魄ついに至らん。

放逸懈怠の者、世に容るるところなく、年老いて必ず^{ほぞ}臍をかむ日あらん。

言行乱れて治まらずば、世に軽蔑せられ、事成らず、哀れ敗残者の群におち、

真理に根ざさずしては、聖賢なく、学術なく、芸術、宗教、等々なく、そもそも生活すらありえない。

愚昧いよいよ深くして、愚昧を愧じず。悲惨滑稽なる一生を送る。

欲望の制御なく、本能のままに動くところには、人格なく、生活なく、喜びなく、光なし。ただただれたる肉塊のみ残る。欲は願にあらず、願なきところ、不退創造の生活なし。

願に棹さして強く生ききれ、願なくして、欲望のみにて一生を空費する者、人生に何ものをも残さず。不徳を悲しまず愧じざるは現代の通弊、百鬼白昼に横行して、青年の魂を蝕む。不徳を悲しまざる者、聖賢を敬わず、仏教は三宝帰依によつてのみ成立す。

地獄罪人は、かえつて大胆にして何ものをも怖れず。しかも苦悩の底に光音天上の享樂を求めるといふ。汝、汝に沈潜せよ、はたして何を見出す。

人は禽獣と異なる。

いわく礼を知る。いわく恩を知る。いわく徳を積む。いわく言語を持つ。いわく文化を持つ。

されど見よ。禽獣にして限りなき欲のために迷うものありや。わが怒りのために、他を殺すものありや。愚痴のために自殺するものありや。人はときに禽獣よりも劣る。

宗教は、人間によつてのみ体験せられる至高至純の生活である。正しい宗教のみが、人間を人間の領域にまでつれ帰る。家郷を忘れて、欲の広野に、愚痴の巷にさまよえる流転の子を、普遍の家郷にとつれ帰り、その与えられたる本性の發揮によつて、浄土を莊嚴せしめ、失われたる生の歡喜を廻向して、悠久なる実在と不二一体の生活を成就せしめるのである。

汝の当然に住すべき領域に帰るとき、汝ははじめて南無阿弥陀仏の真意を信知するであろう。